

東陽房忠尋の著書に就いて

田 中 恵 春

1

東陽房忠尋師の著書と云はれるものを先づ諸古書目録に就きて檢するに、その記事の異説紛々たるに驚かざるを得ない。少數の共通書目を除いては、出入甚だしく従つて何れを選擇すべきかについて信據するに足るものは殆んど稀であると言つてよい。一往それ等を摘記して吟味することにしよう。

まづ弘化二年(1217)八月拾遺の『日本國天台宗章疏目錄』によると、

○東陽房忠尋 西塔北

相承義集

三大部骨目 三帖

枕雙紙

玄義書合 四十ヶ條事書

止觀書合

別紙抄

文句書合

東陽房忠尋の著書に就いて

右の如く七部をあげてゐる。ともに卷數を記してゐないのは甚だ遺憾である。而して玄義、文句、止觀の各書合と云ふのは現存してゐない。或は所謂『漢光類聚』を指すものではないかとも思はれるが、「四十ヶ條事書」とあるから同書でなきことは明かである。『三大部骨目』もその名に於いては現存しない。これは『三大部七百科』ならずと考へるが、未だ確證は得られない。次に『相承義集』であるが、これは『相傳義集』を指すものであらう。『別紙抄』は未詳であり、『枕雙紙』のみは現傳されて『覺心集』とも云はれてゐる。

次に『本朝台祖選求密部書目』の「中古明匠述作」のもとには、

法華五部九卷 東陽房座主忠尋

高漢德王鈔 同上

七百科 三大部 同上

枕雙紙

の四部をあげてゐる。これまた調卷を記してゐない。然し右四部は共に現存してゐる點に注目しに價ひする。

次に『天台霞標』の諸祖選述目錄のもとに於ては、

○忠尋和尚

法華 五部九卷

高漢德王抄

三大部七百科

枕草紙

疏記鈔 十卷

四教顯鈔 三卷

大論義鈔

玄義鈔

雜々集

と九部の著作をあげてゐるのであるが、初の四部の書目は前掲の『本朝台祖撰述密部書目』に全く等しきものであり、後五部の書目はその上に附加されたことが看取されるが、いまだそれ等に就いては詳にすることを得ない。うち『雜々集三十卷』とあるが、心榮師に『雜々鈔三十卷』の現存をみるがいまだ忠尋師の撰名のもとにあるを聞かない。次に北嶺僧釋龍堂編輯になる『山家諸德撰述篇目集卷下』には左の如く記載されてゐる。

東陽房闍梨忠尋撰

大論義鈔

法華五部九卷

高漢德王鈔

枕雙紙

三大部七百科

疏記鈔十卷

四教顯鈔三卷

東陽房忠尋の著書に就いて

已上七部天台霞標爲兵部仁快撰。五大院闡梨安然撰以七部、爲忠尋撰甚誤也。今即記之、天正錄仁快撰玉泉抄一部而已。今依之、後賢思之。

玄義抄十卷

雜々集三十卷

漢光類聚四卷

と。即ち龍堂の説によれば、大論義抄以下の七部を『天台霞標』は仁快師の撰となし、安然師の七部を以つて忠尋師の撰としてゐるのは誤であり、天正錄によれば仁快師の撰述は一部のみである。とて『霞標』の誤謬を指摘してゐるのであるが、現行『霞標』に於いてはその所論の如きところは全く見出し得ず、即ち『霞標』の諸祖撰述目錄のもとに前掲の如く忠尋師の著作書目をあげ、仁快師のもとには『玉泉抄』一卷を記載してゐるのみである。尙ほその他に書目に關しては右に該當する記事を見出し得ない。されば龍堂の右の記事は全く腑に落ちぬものと言はねばならぬのである。

以上、四目錄に就きて忠尋師の著作書目に關するの部分を檢したが、それ等に於ては全く參差出入甚しく、また假令忠尋撰として記載されてゐるものゝ中にもそれが果して眞撰なるや疑問を抱かざるを得なく、明かに假托僞書と判ぜられるものゝ含まれて居り、また重要著作の缺漏を見出すに於ては該古書目錄等には何れも直ちに信賴するに足るべしとはされ得ない。斯の如く古書目錄の上に於ける著作の考察には、甚だ確實性に乏しく危険を伴ふことを知るのである。茲に於て現存資料に方向を替へ、忠尋撰名になる古書を各所の經藏に探ねて、それ等の一々に直接觸れることに依り考察を進め檢討することの妥當安全なる道をとらざるを得ない。

いま忠尋師撰名になる現存書籍を涉獵してそれをあぐるならば左の如くである。

法華略義見聞三卷 正教藏 (佛全)

法華略義聞書一卷 同 同

法華文句要義聞書 殘闕四卷 同 同

漢光類聚四卷 同 同

法華五部九卷書一卷 正教源寺藏

無縫目一軸 正教源寺藏

天台宗秘決要集一卷 正教源寺藏

聖教隱形一卷 正教源寺藏

枕雙紙一卷 正教源寺藏

相傳義集二卷 正教源寺藏

天台法門名決集一卷 叡山文庫

三大部七百科三卷 叡山文庫

釋尊影響卷一卷 同

圓頓戒脈譜口決一卷 同

菩薩戒口決一卷 正教藏

金剛秘密山王傳授大事 調卷不同 叡山文庫

弘仁口決一卷

正教藏

右十七部が忠尋師撰名に於ける現存書籍であるが、なほこの他にも秘藏せられてゐるものがあるかも知れぬが、未だ遇目の機を得ない。また嘗つて存在し現存せぬものがあるかとも思はれるが、それに就きての考證は現在のところ不能といはざるを得ない。何となれば未だ忠尋師の著作に對する確實な文献は上述の如く存在せぬからである。前掲十七部中『大日本佛教全書』所收の四部以外は言ふまでもなく悉く古寫本であつて、從來秘庫の篋底に珍藏せられ所謂唯授一人の嚴誠にはあらざれど容易に披見を得ぬものであつたのである。一往それ等の書籍に就きて概略分類してみると、

A、諸多の口傳を雜然と記述したもの

聖教隱形

無縫目

B、口傳思想を体系的に記述したもの

枕雙紙

天台法門名決集

釋尊影響卷

法華五部九卷書

C、七簡法門に關するもの

天台宗秘決要集

弘仁口決

D、三大部中心のもの

法華略義見聞

法華略義聞書

法華文句要義聞書

漢光類聚

三大部七百科

E、論義に關するもの

相傳義集

F、圓戒に關するもの

菩薩戒口決

圓頓戒脈譜口決

G、山王神道に關するもの

金剛山王秘密傳授大事

右の如く大体七種に分類することが出来るが、勿論斯る分類は便宜上よりするものであつて、内相外相より嚴密にすればその攝屬にも亦移動を來し、單純に決定するわけにはゆかない。仍つて箇々の考察に於てその文學的形態の上より、將亦思想内容より分析批判されるべきであることは論を俟たない。

併して上掲十七部の書は全てその撰名を「忠尋」となすものばかりである。然らば右の書籍の全てを東陽房座主忠尋師の眞撰として取扱はるべきであらうか、亦その奥書等の記事によつて、全的にそれ等を信據すべきであらうか、茲に重要な研究を必要とされて來るのである。由來中古の書籍は假托僞撰の雲霧に深くとざされて一として明確に眞撰なりと斷定を許され得るものは頗る稀である。いま忠尋師の著書に於ても亦その傾向を多含されてゐるのであつて、それが先聖をして斯くも雑多の書目を羅列せしめたことにも想到すれば容易に首肯しうるであらう。さればその考證檢討には最も嚴密に行はねばならぬと考へるのである。

いま前掲書籍を逐次考察するにさきだち、まづ序文、奥書、刊記等の明かに存するものを摘出して年代順に配記するとまた左の如きである。

無縫目

奥云 保安元年（1780）五十六才

天台宗秘決要集

序云 保安二年（1781）五十七才

聖教隱形

奥云 大治元年（1786）六十二才

法華五部九卷書

序云 同

法華文句要義聞書

奥云 同

漢光類聚

奥云 大治三年（1788）六十四才

右の六部となるのであるが、此等の六部に就きてはさきに忠尋師の傳記的考察（大崎學報第八十七號、棲神第二十一號發表）のもとに於て多少言及するところがあつた、が更に筆をあらためて文献學的に委細に検討し、資料としての價值如何を定め、思想教理の究明を行はねばならない。以下前掲十七部の一々に亘つてそれを進めることにしよう。

(但し紙數の都合上本號にはそれ等のうちまづ『無縫目』及び『天台法門名決集』の二書に就いて發表し、余他は號を遂ふて掲載することにする)

2

無 縫 目

いま所見の『無縫目』は正教藏本と大谷大學圖書館藏本との二本である。この『無縫目』の所藏は余の寡聞か右二本のほか存するをきかない。而して正教藏本は鳥子の卷子本であつて、寫本年時筆者等の明記がない。文字頗る精確立派なるものである。元來正教藏と云ふのは、元龜兵變已後叡山再興の氣運高まると共に教學の復興も隨つて企てられ、諸國に散在された書籍の書寫收拾につとめられた時、江州芦浦觀音寺舜興師の一大蒐集にかゝるものを、西塔北谷正教坊に所藏せられたに名づくるのである。現在は台麓西教寺の秘藏するところとなつてゐる。こんにち日本天台研究に關する資料の最も豊富に藏せられ、また箇々の藏書の權威ある点に於いて眞如藏(叡山東塔南谷實藏坊)と共に雙壁とされてゐるのであつて、舜興師はその努力辛苦により蒐集された書籍の一々には、必ず書寫せしめし年時及び所藏年月日と共に自署名するを通例としてゐる。然るに本書の如きは舜興師の奥書もなく勿論また何等の書寫年代の記載もなきはまつたく稀なところである。或は表裝等の破損せるよりみてその部分の脱落したものかとも思はれるが確證はない。然しその紙質書風等の古色より考察して相當歲次の閱せることを知るのである。

次に大谷大學圖書館所藏本に就きてみるに、これは墨付二十帋の寫本であつて他に『慈覺大師一心三觀』等の四部

と合本の普通袋綴大本である。その寫本年時に關する奥書を摘記すると、

萬治元曆歲晴月下旬初五辰四明西塔北溪天政蹂躪之。

古本眞書而卷本也、爲當用爲開本草書。裏書依處黑字朱字亂書、殊裏書當處前後亂書、後見徒者得事書可見云_云。
于時寛文十辛亥九月二十八日求之。

筆者蝙蝠沙門伊藤松惠坊。

とある。即ち寛文十年(1695)の寫本にかりその原本は萬治元年(1698)の書寫になるものであつた。この奥書の註記によれば元來は卷本の眞書であつたのを寛文の寫本に際し當用のため開本草書とされた事情が看取される。されば『無縫目』は古くは卷子本の形に於いて相傳され來つたことが推知されるのであつて、したがつていまの正教藏本に古色をうかがはれ資料としての價值をも認められるのである。なほ右二本を對校するに後者に誤字脱字等の多くの誤謬を存するを看出した。仍つて正教藏本を第一資料として研究をすゝめて行くこととする。

谷大本の表書には『忠尋口決』と大書されてゐるが、正教藏本は卷本でもありその部分の破損によつて覗ふことが出来ない。内題はともに『無縫目』である。内題下には正教藏本は「東陽忠尋」とあり、撰名を出してゐるが、谷大本に於ては「私云古本卷物也」とあつて撰名を記してゐない。これは恐らく脱漏と思はれる。序文は兩本共に存しない。内容についてみるならば、『無縫目第一』より「第九」にいたる九節よりなつてゐる。而してその各節々は何等組織的体系化の爲のものと別けられたのではなく、但に一題目に對する口傳を記述するを以つて、一節となしてゐるにすぎない。また註疏的でもなければ數法的でもない。重要な口決を併列的に記述されたよりみざるを得ないのである。書中指圖三面あり、また諸所に裏書されてゐるのである。(谷大本にては裏書は註書されて本文の傍に挿入さる)

末尾に忠尋師の奥書がある。掲出すると、

沙門忠尋謹集代々口決以爲無縫目。山家相承四ヶ深義恐未學猶可滯。或仍重造九卷抄、以決其大旨。或散自心之朦昧兼思令法久住之利生。翼諸佛菩薩哀愍給。

于時保安元年庚子四月十五日始草之同六月十九日書點畢。

右が忠尋師自らの奥書といふものである。忠尋研究に於いて重要な一資料であると云はねはならない。即ちこの一篇の書は忠尋師が代々の口決を謹集してなれるものであり、これに題して『無縫目』と名付けたとの縁起が記され、なほまた山家相承四ヶ深義は末代の學者には甚深難解の法門であるから重ねて『九卷抄』を造りその大旨を徹底さしひいては自心の爲めに、令法久住のために擬せんとの意をのべてゐるのである。こゝに於いて將してこの奥書のいふところに従がひこれを忠尋師の眞撰とし信據すべきであるか。更に吟味するの必要がある。

まづこの書の著作された年次はこの奥書によれば保安元年（1190）であつて、四月十五日より起草にかゝり六月十九日には書寫を終へてゐるのである。よつてその間二ヶ月の日子を要してゐることが知られる。該書の著作としては相應のものといつてよい。而して保安元年は四月十日の改元であるから改元直後の執筆であり、二ヶ月後の完成であるからこの点に於いても何等の矛盾を見出し得ない。恰も忠尋師は五十六歳であつた。さきに忠尋師の全生涯に對する全面的考察のもとに於て論究した如く（大崎學報八十七號）師の五十三歳より六十二歳に至るその間は内面的思想組織時代とも云ふべきであつて、前期の過渡的緊張期に於ける同外的果敢な活動は、この期に入るに従つて向内的となり、靜觀的狀態のうちに思索し、思想の整理に努めた結果、そこにそれ等の記録がなされ、著作時代を現出するにいたるのである。斯る生命現象の過程に對する考察の結果よりするも、この五十六歳所産はまた何等訝しむに足りな

30

次にすこしく内容の方面より考察をすると、さきに記した如く本書は現存資料の刊記を有するものうち最初に属するものであることに注目して、書中の思想を検するに、特異の形態としてそこに歴然と破密思想の存することである。(三密破の思想に對する教理史的考察は後に取扱ふ)この思想の存することはとりもなほさず此書の著作されし時期の特性を遺憾なく物語るものであつて、即ち前期に於けるその積極的活動は對外的奮闘に向けられそこに鞍馬寺(元東密に屬す)に對する改宗問題にまで交渉を持するにいたらしめた。斯る事件の後に來れる内面的躍進期の思索時代に入つて、先づ執筆されたとみらるゝ本書に斯る思想的反影の齎らされるはまた必然の數と言はねばならぬであらう。さればこの破密の思想は忠尋師の思想教學の上に於ける一大特色であると共に、それが記述されたる『無縫目』の此期に於ける所産たるを首肯するに足る證左ともなるのである。更にまた該書中の語句の上に就いてみるに、人名に關して左の如きがある。

覺超遺告云

第二ノ下

勝範隨分大事也

同

勝範口傳云

同

蓮實房勝範

第三ノ下

長豪口傳云

第二ノ下

私云長豪最後口傳云

第三ノ下

先師或口傳云

同

先師長豪口傳曰

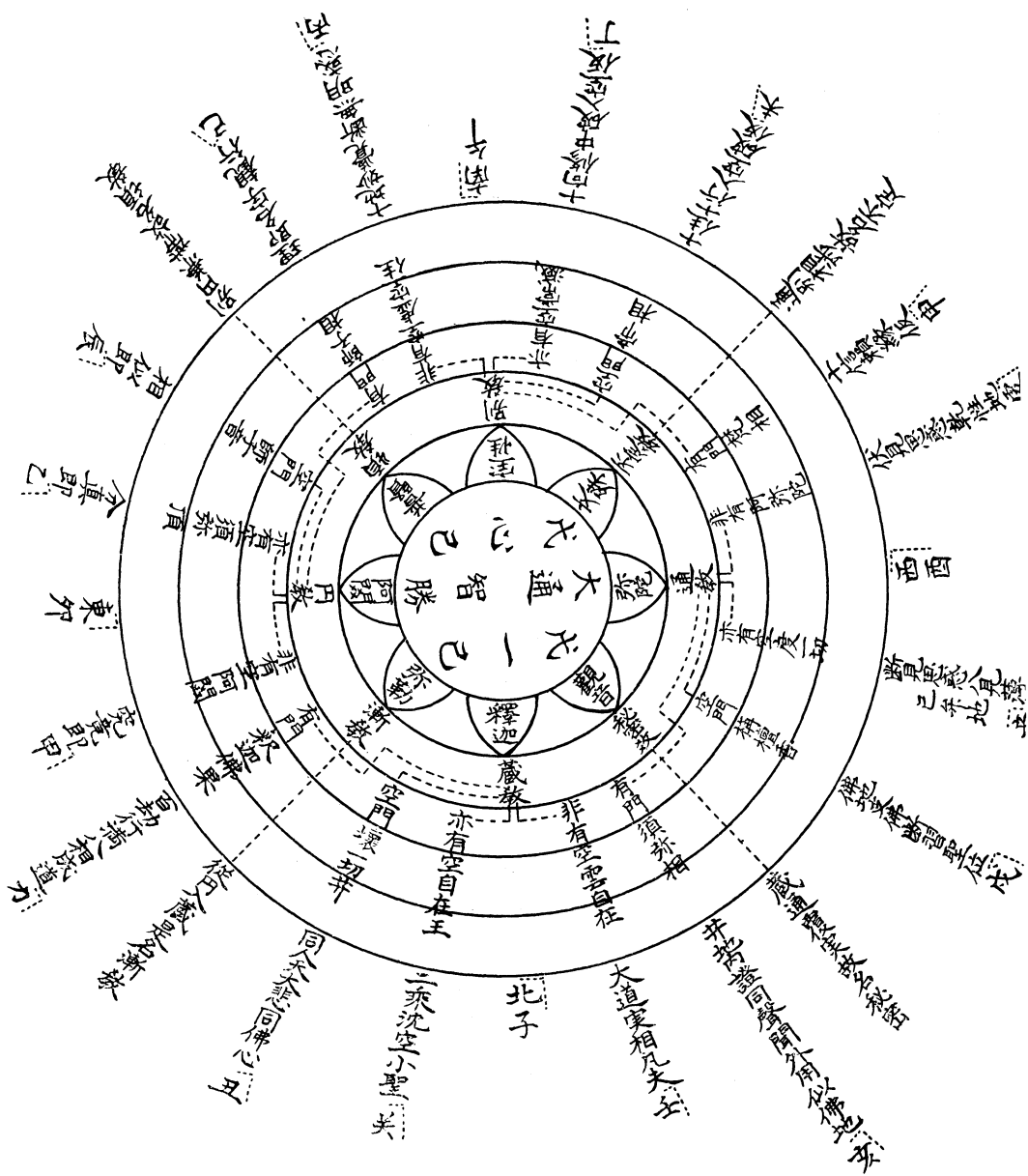
同

等であつて、此外に「傳教大師」があり稀に「慈覺大師」「惠亮」「慈惠大師」「惠心先德」「寛印」等があつて「空海」の名が二箇所に出てゐるのである。茲に於て最も注目しなければならぬのは「先師長豪口傳云」である。單に「先師」と言つたところもあるが長豪師を指して「先師」と呼びその口傳口決を記述してゐるところより見て「私云……」の主人公はとりもなほさず忠尋師となるのを知る。なほ「私云長豪最後口傳云」はその間に於ける歴史性を充分に含有するのとして、學師長豪と忠尋師との關係を明確に物語れる貴重なる資料といはねばならない。茲にいたつて最早や『無縫目』の一書、忠尋師の著作として何等の疑偽もなく信據するに足るであらう。なほ長豪師に向つてすでに「先師」と呼び「最後口傳」とあるによつて此の『無縫目』の執筆された以前に既に長豪師は示寂されてゐたことをも看取されるのである。また、傳教・惠亮・慈覺・慈惠・惠心・覺超・寛印・勝範・長豪等の師名のあるのは自らその思想系統のよつて來るところを指すものとして注目されるべく、これがやがて所謂惠心流學派系統を組織してゐる点に於ても大いに着目しなければならない。「空海」は三密破に於ける所破の人としてあげられてゐるのである。なほ末尾の奥書に記されてゐる如く、重ねて『九卷抄』なるものゝ製作を告げられてゐるのであるが、その後大治元年に至つて『法華五部九卷書』が著述されてをり現存してゐるところよりみて、また何等の偽点もない。以上の諸理由よりして『無縫目』は忠尋師の眞撰なりと茲に斷定を下すものである。

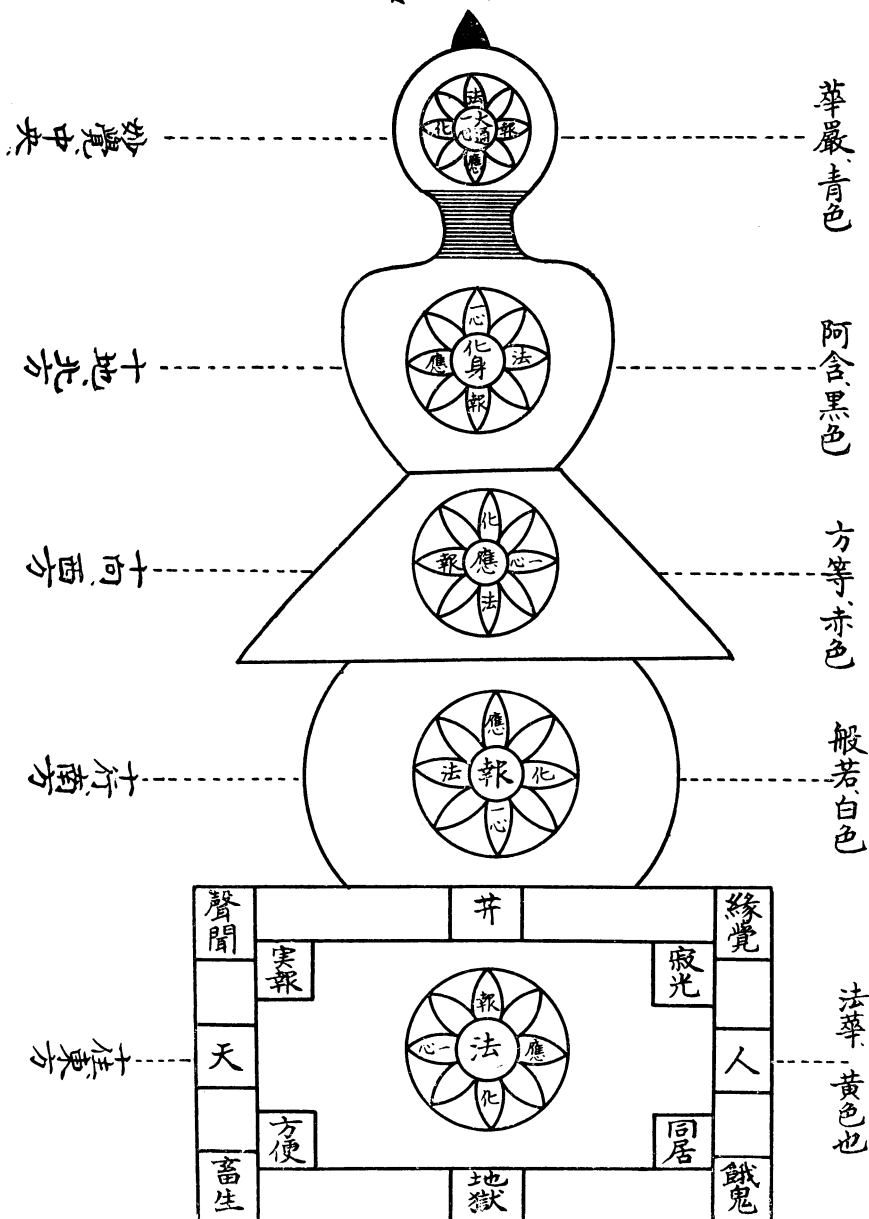
3

以上に於て『無縫目』が忠尋師の著作としてその確實性を把握することを得た。引き続き本書の内容に就きて思想教理の特異性或は重要性を有するとみられる二三の問題を提擧し論述することとする。

本書所論の中に於いて先づ以つて注目すべきは色心二實相論に關す思想である。心實相、色實相、及び色心未分實相は忠尋教學に於ける大綱をなすものであつて、本迹二門教理の捌きを種々なる角度に於て爲されてゐるが、この色心二實相が最も特色をなすものと言つてよい。いま「無縫目第六」「同第七」にはそれが具体的、綜合的の圖現に充當されてゐるから、まづそれを紹介することにする。



婆塔寶多



右のうちA圖は心實相圖であり、B圖が色實相圖である。A圖は八葉九尊を中央に横に五輪・五大を表し、B圖は豎に五輪・五大を現し、ともに多寶の妙塔を顯現せるものである。A圖は行者の心性、胸中八葉の功德を示し、これは迹門理觀である。B圖は行者作の當相すなはち住行向地等妙覺であつて、本門事觀の意の現れであるとする。而して約機情、有色心得悟。約佛本意、本迹未分一實相理。約心實相、八葉功德、色實相邊、法界塔婆。

と言つてゐる如く、右の色心二實相は所謂機情の得悟に約したものであつて、それに對し佛意に約せば本迹未分の一實相理であると説くのである。また、

三身、四土、依正二法、但是行者一心異名。

と述べ、「正形表、即有情形。有情形色亦國土相」なりとて己身塔婆、法界塔婆を示し、なほ「傳教相承鏡像口決」なるものを記述してゐる。すなはち、

心名天、色名地。色心躰一、是名心鏡。心名本覺、身名本理。此色心者、非佛造非人天作、法爾自然天真法、故心鏡明、故現像名鏡。心像本有、是名無作三月如來。毘盧遮那身土不二、名常寂光、故自然所成三身成道。三身相即、四教互具、故名一家八教法門。互具故不定、不定故秘密、漸頓二教、其意可知。乃被接名別義、只是無作三身本功德也。

とて色心天地躰一にして、本覺の心、本理の身、共に法爾天然天真獨朗たり、五時八教の法門また無作三身の本功德なりとなす。斯くの如くにして本迹未分、佛意の境界を主張してゐるのである。なほ、

彼慈惠大師隨分大事也。傳教慈覺御在生時、唯有口傳、不書傳之。末代學者、可信輕之、勿輕漫矣。と述べてゐる。

以上の如くに色心二實相圖を顯すのであるが、本書に於ては更に詳細なる論證的記述をされてはゐない。元來『無縫目』一卷は、種々なる法相を簡單なる口傳的形式のもとに圖示されたばかりであつて、いまの實相圖も亦然りである。然るにこれと關聯をもつところの『法華五部九卷書』には『無縫目』の思想をしてより一層委細に詳述せるものがある。よつてこの實相圖の組織的並びに理論的方面に關する作者の意も、該書を考究することによつて自から明となるからいまはそれに譲つて略することとする。

されど茲に注目しなければならぬのは、本迹兩門の理致を機情に約して斯の如く堅横の塔婆に象徵し、教理の大綱を具体的に圖現したそれについてである。これは言ふまでもなく密教に於ける兩曼現圖の思想より成れるものであつてとりもなほさず圓宗教學の密教的表現と言はざるを得ない。否なむしろ、その教學史上に思想史的考察を以つてすれば、密教の上に立たんとする圓宗教學の事觀成立への段階にあるとみななければならぬであらう。これにつきてはまた後に論ずることにする。なほ本圖に於いて更に注目さるべきことは、その八葉九尊の中尊に大通智勝佛を配せる点である。四佛四菩薩の八葉も通途の密教諸尊を羅列せず、殊に中尊大日如來たるべきを排して、大通佛をもつてせるところ、眞言密教より逸脱せる法華圓宗思想への顯揚炳たるものがある。これ忠尋師の教學をして日本天台史上に最も意義あらしめる重要素と言はざるを得ない。先きに一行禪師によりて法華經觀の密教化が計られてより、弘法大師に『法華開題』あり、また慈覺・智證・安然等の上古天台諸師等が、ひとしく密釋をもつて法華の經旨をうかがひ『講演法華儀』等の如きが製作されつゝ全く密教化するにいたつてゐたのであつた。然るにそれ等密教化されし言家の法華經觀に對して、いま本書は全く趣を異にし、法華の教主を餘佛にからず、偏へに一經の旨趣をもつて首尾一貫釋成せんとしてゐることが看取されるのである。されどその教主たる尙ほ未だ迹門三千塵點の大通佛にとどまり、本門壽量

開顯の久遠本佛如來も十六王子として覆講を餘義なくされてゐる。本書は斯くて顯本論史上にもまた好固の一資料を與へるものとして重要視さるべきであらうと考へるのである。

4

次に本書に於いて重要な思想として看取されるのは、その破密思想の鮮明に顯現されてゐると云ふことである。即ち前記色心二實相圖を表示したる後に於て斯の如くある。

右色心實相八葉五大、於諸經中都無顯說。唯在法寶塔品中明了說。三密教輩、取法花經多寶妙塔、已成宗義。空海堅執顯密不同、迷文滯義、慢高見深。門人亦復如是。未代學者勿信於斯、可咲可咲。(無縫目第六)

と。即ち前述の如き色心實相、八葉、五大の説は諸經の中に全く顯說されては居ず、唯だ法華經寶塔品に於いてのみ明さるゝ至上の法門である。然るに眞言三密宗の輩はそれを取つて己が宗義を成じてゐるのであるとなし、尙ほ續いて空海師を所破としてその顯密不同義を難じ、さては「漫高見深、可咲」と斷じてゐる。なほいま一文を掲出すれば答云、多寶佛塔都無密教、唯借法花寶塔中所說、建立三密宗義六大法門。

とて三密の宗義、六大法門の教義は法華寶塔中の所說を借り來つて建立するところのものであり、元來彼家に所藏されるに非ずと斷じてゐるのである。

斯くて法華經多寶の妙塔を以つて諸經不說最勝の教法たるを顯揚し、それによつて色心八葉五大の説を立て、以つて眞言秘教の六大三密の教法を破したのであつた。而らばその所破の密教とは台東兩家の何れにあるかといふに、さきに掲出したる文についてみれば、所破人として空海師があげられてをり、また六大法門を所破法とせられてゐると

ころより考察すれば、専ら東密をのみその對照としてゐる如くみられるのである。然るに二實相圖に於いても言及した如く、偏へに法華の教法を顯揚するに勤めて密教的釋義を用ひず、殊に中尊大日如來を排して大通佛とせる思想より考察すれば、總じて台東兩密をもその所破の對照としてゐるであらうことを推測するのである。本書一篇首尾一貫して法華思想の本門的釋解に終始し、殆んど密教の教理は影を斷ちて依用されてはゐない。茲を以つてしてもその所破の兩家の上に及べることを肯肯し得ると思ふのである。されどこれを以つて直ちに忠尋師には全く密教の要素を排除し盡せるかと言ふに爾うではない。前にも一言した如く、既に斯る二實相圖の表示されたるは胎金兩曼現圖の密教思想にその基底を置くものとみななければならない。また忠尋師の他の著書の上に於いても密教上の用語を以つて表現し密釋を加へられてゐる場合も不尠看取されるのである。尙ほ前掲文にもある如く、顯密不同義を破せる半面にはまた顯密一致の理を肯定せるかにも推測され得る。されば全然密教を排除し盡すを以つて忠尋師の根本的態度とされたとはならないのである。されどその破密思想の嚴存するのは既に斯の如く歴然たるものであつて、茲にこそ忠尋師の日本天台史上に於ける特異性を見出すと共に、その重要な位置たることを示すと言ふべきである。日蓮上人は既に忠尋師の此點を道破して如斯言はれてゐる。

華嚴眞言等の人々の即身成佛と申候は、依經に文は候へども其義はあいてなき事なり、僻事の起此也。弘法慈覺智證等は此法門に迷惑せる人なりとみ候。何況其已下古德先德等は言ふにたらず。但天台/第四十六の座主東陽の忠尋と申人こそ此法門はすこしあやぶまれて候事は候へ。然れども天台/座主慈覺の末をうくる人なればいつわりをろかにてさてはつべき。(大田女房殿御返事 P.1971—2)

と。即ち上人は華嚴、眞言に於ける即成の法門は有文無義なるを指摘し、弘法・慈覺・智證等の諸師は此の法門に迷

惑し、終に理同事異、理同事勝より事理俱勝にまで進み、顯劣密勝思想を以つて法華を墜し、眞言密宗をして強盛ならしむるに至つた僻事の發祥をなすものと破して、それが法流を波む末師に對しては「言にたらず」とて極言をもつて破折を加へられてゐるのである。然るに唯だ忠尋師に對してのみは加擔人としての態度を以つて望んでゐられる。それは即ち「忠尋、申、人こそ此法門はすこしあやぶまれて候事は候へ」とて、斯る密教に對する疑惑不信より破密思想の抱懷されてゐた點を舉示されてゐるのであつて、とりもなほさず本書に於ける忠尋師の斯る思想を目されしと思考するのである。然るに尙ほ評されて、その慈覺末流なるが故に徹底的破折の鋒を眞言教の上に振はなかつた點をも、言葉巧みに表現されてゐる。これまた忠尋師の諸著作の上に遺憾なく看取されるところである。如斯上人の間眼は早くも忠尋師の思想を道破して餘すところがなく、その含蓄多き寸言裡に印象深きものが藏されてゐると推される。然るに古來右の上人の御文に對してその典據を探ねて出典を明示されたものは一つとしてない。啓蒙講師すでに何等の言及するところなく、諸典また未詳としてゐる。以つて本書の秘襲され來り容易に外見を得ざりし結果を物語る一證左ともなると言ふべきであらう。

斯の如く忠尋師に歴然として破密思想の存したことが看取されたが、茲に注目さるべきはその天台教學史上に於ける重要性である。由來密教は傳教大師入唐四宗相承して止觀遮那兩業を建て、もつて山修山學の規範とされ、また空海師入唐、東密を建立するに至り、眞言密教は吾國に燎原の大火の如き勢を以つて擴まり、その三密事相は時代人心を捕へて平安文化の基礎を築きつゝあつた。天台教學またそれが影響を蒙らざるを得なく、圓仁・圓珍・安然の各師輩出して一は東密への拮抗の爲め、一は圓宗擁護興隆の爲めに専ら密教思想組織へと密度を高めるに至つて、その結果は安然師の四一十門の廣汎なる台密教學を体系付くるに至つたことは更らに多言を要しない。日本上古天台史は斯

くて密教中心の時代と言ふべく、一行禪師に發したる顯密一致の思想は、茲に全く天台法華宗をして眞言密教三密事相の宗と成るに至らしめたと言ふも過言ではなかつた。然るに慈惠大師に及んで叡山佛教は一劃期をなしたのである。師の功業の數々はその政治的手腕と共に德行を讃へられてゐるが、就中、廣學堅義の論議制度を確立するに至つて法華圓宗の教學が勃興され、密教中心時代より圓宗中心時代への限界をなしてゐると言ふべきである。大師の法資また顯密兩教に巨匠を輩出して、密教に於いては事相の大成を齎らし台密分派の形成を將來し、それに對して源信・覺運兩師を曩祖とする惠檀の兩學派は顯教圓宗の復興を顯揚し來つて、所謂中古口傳法門の如きが醸成されたのであつた。斯の如くにして時代は當さに顯教圓宗中心へと移動されて行つたのであつたが遂に鎌倉新興佛教の結成を迎へるに至つて、密教は漸くその形骸を残して衰運をみるに至つたのである。されど天台教學史上にあつては未だ全く密教思想の喪失されたと言ふわけではなく、依然としてその底流をなしそれ等の教學の推移の裡に媒養素の役割を演じて存してゐたことを看過してはならぬのである。

然らばその段階に於いて、密教は如何なる取扱をされたであらうか。前述の如く良源師は圓宗教學の勃興に努力されたとは言へ、決して密教排除に勤められた如き形跡は認められない。或は後世よりそれを回顧して其處に密教を疎遠ならしめた結果を見出さんとするかも知れずしも不能ではないが、さればとて積極的破密の思想は良源師に到底認容され得べくもない。然るに法資惠心院源信師に至つては、その教學殆んど密教思想を蟬脱して偏へに顯教圓宗の極理を以つて淨土念佛思想の發揚に勤めたのである。されば師の『枕雙紙』には左の如く述べてゐる。

我祖師天台大師立六即佛。我等今纔聞三諦名字、知我即眞如、六即中攝之者、當名字即始。若以此解在心不忘、假使室手杜口、徒行住坐臥、朝起暮眠空雖送年月歲數、一乘觀慧念々増進、自然流入薩婆若海矣。

と。即ち文中「空手杜口、徒行住坐臥……」とあるのは所謂三密事相を空しくしてこれに據らずとも、只管寶號を唱することにより我即眞如、我即法界を知り、自然に薩婆若海に流入することを得るであらう、とて身口意三密業を修せざることを表明してゐるのである。茲に於て源信師の密教に對する態度は既に游離されてゐることを看取する。師にまた一部の密教關係の著作も殘されてゐないことはそれを物語るところの一證左でもあらう。然るに師に於いて尙ほ未だ顯露に破密の義を説かれてはゐなく、巧みに密教々義を圓宗の教學に應用し來り、本覺思想を組織し高潮せしめてゐるのであるが、其處には最早や三密事相の現實的具象的威力は全く喪失されて問題とされては居ない。さればとて密教への積極的破折的態度をもとられず、只管彌陀法にのみ出離の要道を求めためである。斯くてその後、忠尋師に來るに及んで茲に始めて積極的破密の思想が顯然として説かれたのであつた。師は、その事歴の考察に於て論及した如く良祐、長豪兩師より密灌を受け、殊に行玄師と共に三昧流の雙壁とされてをり、また岡崎方・千妙寺法流の祖とされてゐる。然るにも不拘師には亦一部の密教關係の述作を見出すことが出來ず、剩さへ如上の破密の言辭を顯說するに於いて、寧ろ師の對密教思想の尋常ならざるを看取すること既述の如くであつた。然らば如何なる事情に起因して斯くも師をして三昧流巨匠たらしめたかを考へるに、それは後世事相分派上に熾烈を極めるに至つた結果敢て末流の拮抗がもたらしたところと解されるのである。とまれ師の思想の全般的考察の上に於ては、三密事相の排除の跡が歴然として存し、積極的破密の言辭をさへ吐露されてゐるのを看過してはならぬのである。然るにまた斯の如く忠尋師には破密の思想存すとは言へ、さればとて全く密教思想を離脱せるものかといふに直ちに爾うは斷ぜられない。その口傳法門の組織の上に盛に密教教學の應用されてゐる點に、源信師に相似たるものがあるのである。これ上古以來密教一致を以つて台密の宗是とするところ、何人も依憑し遵奉して訝しまぬものであつて、忠尋師の對密教思想も

未だ完全に此の基礎を覆するものではなかつたのである。茲に日蓮上人の前述の如き觀察も下されるのであつて、含蓄多き批判の語に傾聴せざるを得ないものがある。斯くて日蓮上人に至り陀羅尼藏經の部攝も判ぜられ、統一的曼荼羅の一元化もはかられ純正法華思想の確立と共に初めて絶對的破密の思想が成立されたのであるが、それに趣く過程に於て、忠尋師の如き思想把持者の存することは、また大いに注目されねばならぬと考へる。師の法孫にまた俊範、靜明、心賀等の如き（二帖抄等）破密思想家の輩出するのも理の趣くところなりと言ふべきであらう。

以上に於て『無縫目』に含有されたる問題を捉へてその重要性につき吟味し考察をした。なほ論究すべき問題もあるが割愛することにして、いま一書、忠尋師撰と言はれる『天台法門名決集』に就きて發表することにしやう。

5

天台法門名決集

本書には實に重要な問題が多含まれてゐるのであつて、それ等に就いて未だ充分なる研究も果し得ず、従つて茲に考證の結果を記述し批判することは避けねばならぬのであるが、いまは一とまづ本書の概要を略記し紹介するに止めて、後日を期することとする。

所見は叡山文庫天海藏。調卷一冊。奥書皆無。寫本年時等不明であるが、天海師所藏本であるところからほぼ當時の寫傳のものと推測され得る。まづ内題撰名を摘記すると、

天台法門名決集 行滿相承
四箇大事 大文大章也。

沙門忠尋記

と記されてゐる。茲に於て第一に注目されねばならぬのは、題下に「行滿相承四箇大事」の割註され、なほその下に「大文文章也」と記載されてゐることである。しかも撰名は「沙門忠尋記」となつてゐる。而して卷中に眼をやれば三十二丁に「依經要門決」と記され、また四十八丁には『大乘止觀決』と掲載されてゐるのである。仍つてその内容方面より考察するに、初丁より三十二丁までは玄義に關する分『依經要文決』のもと十七丁は文句に、『大乘止觀決』のもと三丁は止觀に關する分であることを看取するのである。斯の如くに本書は三大部それぞれに對する口傳口決よりする末疏たることを知り得る。而して卷頭初一帋は序分ともいふべきものであつて、口傳法門の組織並ひに本書の位置に關して記述されてゐるのである。いまそれを摘記すると、

高師最澄貞元廿三年渡漢唐、遇二師傳宗義、道遂師云一心三觀・心境義・止觀大旨・法華深義、留心此四要、衆義通攝。冒頭まづ右の如く記せられ、道遂師相承「四要」の名目をあげ、次に續いて、

行滿師云宗有四箇惣傳、我師智者大師以四惣義通決諸義。其四義者、一傳大師所說三部書義、二傳義道、三傳觀心四授生死一大事一言。

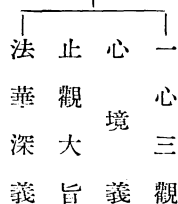
とて行滿師相承四箇惣傳なるものゝ名目をあげ、そしてその連文に、

初本書傳者、此亦有種々別傳。一本書通決別義、七面相承是、如別註、二大文文章、三章段別意決、此本書惣別三種傳也。

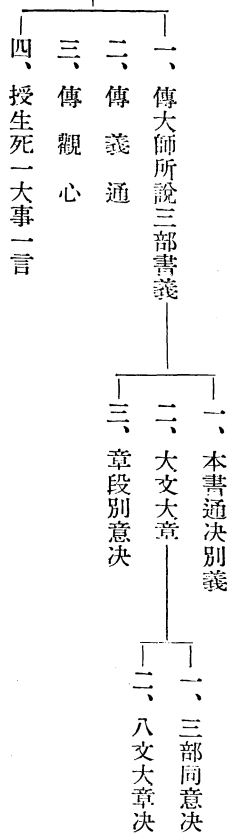
と記述されてゐる。即ち行滿師相承四箇惣傳の第一「大師所說三部書義」または略して「本書傳」と云ふに三傳あることを示し、その名目をあげて前四の惣傳なるに對してこれは三箇の別傳であるとの意を記されてゐるのである。ついで「三部緣起」に就きてまた略記されてゐるのであるが、以上が第一帋に述べられてゐるところの大意である。因

みにそれを圖示すれば、

○道邃師四要



○行滿師四箇惣傳



斯の如くであつて、なほ「本書通決別義」の下に註して「七面相承是、如別註」とある。仍つてこの別傳三箇の中の初傳に關してはまた別に存することを知る。而して本書の『天台法門名決集』は實にこの第二傳に屬するものであるのである。その内題下に、「大文大章也」と特記されて居り、また第二丁の本文冒頭の句は「大文大章傳者……」に始まつてゐるに牒してもそれが明かに看取されるのである。而して四惣義の第二、三、四各傳に關しては本書中には何等取り扱はれては居なく、たと卷尾に於て簡單なる註書をされてゐるにすぎない。それを摘記すると、

次義通者、十七箇五十二重教相、爲本圖如別記

と「義通傳」に關する條目をあげ、次に「觀心傳」に就きて、

次觀心者、一家行分也、一心三觀、一念三千、乃至、事相別行等如別記とあり、次に「生死一大事」に關しては、

次生死一大事者、一安心行者有三類（中略）、二五堪三達傳如別記、三誦經一時禮拜行、法花生死一大事妙行也。

右の如く記されてゐるのみである。「如別記」と註書されてゐるところよりみて、それ等は各々別本をなして存したものと知る。

斯の如く最澄師入唐して道邃師より「四要」を相傳し、行滿師よりは「四惣義」を相承した、而して「四惣義」の「本書傳」にはまた三箇の別傳があり、第二傳の「大文大章」こそいまの『天台法門名決集』である。との所説が卷頭卷尾の二箇所の抒述によつて明らかに看取されるのであつて、茲に於て先づ本書の口傳法門に於ける組織的位置が、また明らかにされてゐるのを知らねばならない。

されば如上の記事並びに本文等に就きて、次に重要な諸問題を提擧することとする。まづ第一に注目されねばならぬのは、最澄師入唐して遂滿二師に偶ひ、道邃師より「四要」を相傳したといふそのことは、日本天台口傳法門の通格であつて、諸書共通の學說でもあるのは今更贅言を要しない。それが原據はまた傳教大師著と傳へられてゐる『修禪寺決』等に發することも既に周知である。然るにいまその遂師相承「四要」に對して、行滿師の「四惣義」（亦名四箇惣傳・四義）なるものゝ相傳を立てゝゐることである。併かも「四惣義」のもとに三箇の別傳を開いて、惣別合して七箇の傳をなしてゐる。さればこの組織はとりもなほさず遂師相承の「廣傳四箇大事」のもとに「略傳三箇」を開き「七箇法門」を立つると相對的なるに注目されねばならない。即ち「遂師七箇法門」に對して「滿師七箇法門」が茲に存するのを知る。從來「惠心流七箇法門」なるものは『修禪寺決』『漢光類聚』『二帖抄』並びに『等海口傳』

等により、道邃師相承弘仁七箇の法門として、その學派的組織体系の存在は重大視されて來てゐたが、行滿師相傳に斯る組織的口傳法門の体系の存することは何等知られてゐなかつた。いまこの『天台法門名決集』に於て斯の如き整然たる組織形体を持つものゝ存したのを發見した次第であつて、茲に本書の重要性をまづ提擧せねばならぬのである。次に問題となるべきは、別傳三箇のうち初傳たる「本書通決別義」のものに「七面相承是如別註」と記述されてゐる點にある。「七面相承」とは傳敎大師撰として『三大章疏七面相承口訣』なるものが全集に收載されてゐるが、それが恐らくはいまの「別註」なるものと考へるのである。他に斯る抄物の存在するを未だ發見し得ず、また兩者の内容を検するに同一思想傾向にあり、緊密なるものが存するのを見出すからである。果して然りとすれば兩者は所謂姉妹篇であることを認めねばならない、この點に於てまた本書の重要性を看取するのである。

次に本文の内容に就きて一瞥するに、その文体、用語の上に於て直ちに感受されるところのものは『修禪寺決』と酷似する點、また『漢光類聚』とも共通する點の多々存することである。いまそれ等に就きて一々典據を舉ぐべきであるが繁に亘るを以つて割愛し他日全き研究の成果を期することとする。

上記の諸點と關聯して、より重大性を逸してならぬのは本書の撰者の忠尋師となつてゐる點である。從來忠尋師は惠心流中古の名匠として、また事實上の惠心流學派祖として認容され來つたことは是れ亦多言を要しない。而して惠心流とは、その學派的解釋に於いて、道邃師相承の思想体系に基底付けられ、出發してゐるとされてゐる。これに對して檀那流は、佛立和尚行滿師相承の法門に在りとされてゐるのであるが、此の學派的解釋の建前を假に肯定するとせば、茲に本書の如き行滿師相承の法門に對する著作に「忠尋記」とあるのは甚だ首肯され難いこととなるのである。然るに立據を轉換して考察するならば、斯る惠檀兩流學派の根據を遂滿二師別傳に出發するとする學説は、其處に何

等の歴史性を持たず、それは後世の學派對立期に於ける専ら惠心流の所産なりとして眺める場合、ひいては忠尋師の學派的存在に對してまでも自由なる觀察を下され、從つて斯る行滿相承法門の著書に對しても猶ほ撰名の如く忠尋記たるを肯定されて然るべきとなるであらう。將して此等兩說に於てその決定を如何にすべきかと本書に課せられたる實に重要な問題である。

尙ほ再度言及し注目を喚起すべきは、本書と『三章疏七面相承口決』とを一具姉妹篇と認められたる點、『修禪寺決』と相似たる點、並びに『漢光顯聚』と關係を持すると見らるゝ點、斯る諸點より考察して此等の書は或は同一系統の所産に屬するならんと推測される點にである。而して一は道邃師相承に假り、一は行滿師相承に、一は傳教大師に假托し、一は忠尋師撰とする。内容の上に於てまた一は傳法四箇決、七箇大事であり、一は四箇物傳、七箇法門（七面口決）である。斯の如く兩者相對的部面の多々含有する點によつて、此等兩者には必ずや緊密なる關係の存するであらうことを想定せざるを得ないのである。されば該書等の間の關係交渉並びにそれ等の撰者、時代等に就きての究明は、聽て日本天台傳法門研究の上に、將亦惠檀兩流學派發生史的研究の上に、根本的解決を齎らす一資料として最重要性を持つものと斷言して憚らない。今はたと本書の如さが存すると、また斯る重要性を内包する問題を提擧するに止めて他日の究明をまち詳論を期する次第である。（續）